

眞生

號月五 卷一十第

A 「昔、或る所に極めて貧困な家に生れた子供と非常な富豪の家に生れた子供とがありました。然に前者は一生貧乏して、その日の暮しにも困りつゞけて、毎日の生活に追はれ乍ら、死で行きました。後者は一生仕事もせずに、遊びまわつて遂に死にました。此の場合、若しあなた方がその何れかを選ばねばならぬとしたら、何れの方をとりますか。」

B 「富者の方をとりますね。」

A 「ところが、富者の方は一生遊んでばかり暮したのだから、此の世に何一つ残した仕事とはありません。然に貧者の方は衣食に困り乍らも橋を架けたり、鐵道を造つたり、井戸を掘つたりしたので、す。だから世の爲めになつたと云ふ點から云つたら、貧者の方が多くなつたと云ふ事になります。」

B 「その點から云へば富者の方より、貧者の方がよいですね。」

A 「あなたはよい方をとりますが、悪い方をとりますか。」

B 「それはよい方をとるにきまつてゐます。」

A 「では富者の方をとるよりも貧者の方をとりますか。」

B 「さう言はれるとやはり富者でありたいですね。」

A 「それでは前と違ふではありませんか。」

B 「全く困つてしまいます。」

A 「皆さん、あなたがたはどちらです。」(念)

苦難の途

金が無くなると、却つて金の本當の有難味がわかつて来るから、本當は金持ちになつたようなものです。
今迄は一圓のお金も、何でもないことに湯水のように費つて了つたものだが、それが此頃は、一圓のお金が来るのを待つてゐる費ふものだから、同じ一圓でも、昔の五圓位の働きを致します。
お金で貧乏したのでなく、實は費ひ方で貧乏してゐるのです。使ひ方です。上手になれば、僅かな金でも立派に苦しい處を切り抜けて行きます。それが「お金」が無いと、金の無いことばかり云つて、まだ費ひ方の向上して居らぬ「自分」の方の缺陷は知らずにあるのです。そんな人はいくら金を貸してやつた處で、ザルに水を入れたようなもので少しも保ちはいたしません。
成程、金も足らなくなつたのには違ひありません。お互に手元逼迫です。逼迫であればある程、一層此の「金」で生きて行くのではない、「腕」で生きて行くのだと覺悟せねばならぬ。「腕」とは何か、金が無くとも切り抜けて行く腕です。金が減れば減る程、金に頼らなくて、金なくて生きる道を研究せねばなりません。
「道」の無い處に道を研究し、「道」を新しく造り出すのが信仰です。魚が水を離れや、水の無い處に生きる魚になるより仕様がありません。現に空中に棲む鳥や、水中に棲む魚、獸がザラに在るぢやないですか。
私達は常に新しく生きる天地を開拓して行かねばなりません。此努力——發明が信仰力です。此信仰なき者は死ぬより仕方ありません。眞に活きる者は、常に此の苦難の途を進む。(尅子)

目次

苦難の途	尅
我が信するみ佛	尅
宗教は變遷する	
土屋觀道	
人生の眞意義	土屋觀道述
(宗教と人生)	安田愷順記
魚釣さんごわたくし	
古賀清一郎	
支部通信	
吾朋便り	

我が信する一み佛

私は昨夜十二時に寝ました。そしてグツスリ一寝入りして、今バツチリと眼が覺めたから、早速起き出しました。恰度朝の四時です。

此間、四時間のことを思ひ返へしてみると何も知らぬ。床の中へ這入つて、横になるや否や、何處で寝てゐるといふことも、どんな夜具を被て、どちら枕で寝てゐるかといふことも何も知らず、全く死人のようになつて寝てゐたと思ひます。

勿論此間に、俺は呼吸を續けてゐるの、何回呼吸をしたの、何回血液の循環を行つてゐるのナンカといふことは更々自分に覺へませぬ。自分が生きてゐるか、死んでゐるか云ふことも全く知らずに居た譯です。それにも不拘、目を覺してみると私は生きてゐたのです。自分には活きる氣も無かつたかも知れぬが、生きてゐたのです。活かされてゐたのです。

自分の意識で生きてゐたのではない、無意識のまゝで生きてゐた。自分の力で生きてゐたのではなく、ある大きい力が私を活かしてゐて呉れたのです。

自分の生命があつて、自分の生命です。自分で生命を支配し得てゐる範圍はホンの僅かであつて、死にたくないのに死なんならぬ、死に度いのに死ねぬ現實です。だから自分の生命は、單なる自分の生命でなくて、寧ろ大きな生命の所有になつて自分が居るのです。

私が「生命の子であつて生命の爲めに活かされてゐるのぢやないでせうか。私の中に小さい魂とか云ふ生命の塊りがあるのでなく、大きな宇宙大の生命の中に、其大生命の働きの一表現として「私」といふ存在があるのぢやないでせうか。「私」と云ふものは刻々に老衰したり、病氣したり、死んだりして、それは大きな大生命の一變現象に過ぎぬものぢやないでせうか。

私は「生命」の神祕を信する、雄大を信する、不滅を信する、進化を信する。

此の生命が自分の人格を向上させて行つて呉れる、これが「生命の思籠」です。我人格の中心に於ける此愛と法則——これが我が信する智慧と慈悲とに在ります如來様であります。(尅子)

宗教は變遷する

土屋 觀道

- A 「宗教は絶対なものと聞きますが、それでもやはり變遷するものでせうか。」
- B 「歴史的事實から申せば、やはり宗教にも變遷はあるやうです。」
- A 「どんな具合に變遷するものでせうか。」
- B 「一がいには申せませんが、之を信する人に都合のよいやうに變化するやうです。」
- A 「然し實際から申せば迷信の如きは必ずしも信する人に都合よいものではないではありませんか。」
- B 「それはたゞ一時的現象です。然それでもやはり之を詳細に調査したらきつと信者その人に都合よく信せられてゐるかと思ふのです。」
- A 「すると、宗教は信者の人に都合のよいやうに變遷すると云ふ事になるのでせうか。」
- B 「大ていの場合やはりその通りになつてゐるやうです。」
- A 「それでは何となくたよりないではないでせうか。」
- B 「それは恰も、衣服の變遷や、家屋の構造の變遷のやうなものです。そんなに服装や住の構造が變化しませうとも、それが人間の生活しやすいやうに變遷する限り、それによることは何もたよりない事ではない。」
- A 「それでも宗教のみは萬古不變の眞理に立つて説かれたものでなくては本當の權威がないやうに思へます。」

- A 「然し、その事なら、服装だつて、住所だつて、やはり永久不變の眞理に立つて出來上つたものでなくてはたよらないものでせう。けれども此の世の中に、そんな永久に變らないやうな眞理が本當にあるものでせうか。若しそれがあるとしたら、それは單なるそれについての原理に外なりません。」
- A 「原理と申しますと、どう云ふ意味なのですか。」
- B 「例へて申せば衣服なら衣服についての原理です。住いならば住いについての原理です。宗教について云へば所謂宗教の原理を言ふのです。」
- A 「それなれば永久に變りませんか。」
- B 「それでさへも、本當のことを言へば絶対に變らぬとは言へぬかも知れません。然し先づ他のものよりは全體に於て變らぬと言ふ程度位のものかも知れません。」
- A 「然はその變ると云ふことのみは變らぬのでせうか。」
- B 「さあ、それも亦判りません、然しそんなことは先づどうでもよいではありませんか。あなたが本當に心から楽しく、永遠に生き活きて行くことができたら。」
- A 「それはよいに違いありません。乍然さう云ふ道が若しあつたなら、そのみは永久に變らぬものでありたいからです。」
- B 「ところが、それがまだ今日まで、完全に發見せられてゐないやうです。乍然人は何故かそうした道を心から求めて居ります。そして、それを次から次へとたどりにたどつて行くところに、一つの輕路があり。變遷があるやうです。だからさう云ふ意味から云へば人類の衣食住の變遷だつて、そこに一つの一貫した法則があつて決して偶然なものはないやうで。そして、その結果はやはり人間の生活に都合よい道をたどつて、それに都合よく變遷して行くこと云ふより外に申しやうがありません。」

ん。」

A 「すると、宗教の變遷と云ふことも、さうした意味に常に變遷すとおしやるのですか。」

B 「先づさうだと申しても大した誤りはありません。少くとも多くの人類が宗教と云ふものを持つ限り、その宗教の内容と形式とを深く研究し、且つその宗教の思想信仰の内容とその形式の變化とを考へて見まするとき、私はいつもかうした考へが私の心の奥底に現はれて來るのを否むわけに行きません。」

A 「すると、多くの宗教が新に與つたり、亡びたりするのはその理由は全くこのやうな事情によるのでせうか。」

B 「さうだと申して差支へありません。そこに宗教の盛衰あり、又興亡ありと申してよいと思ふのですが、多くの人々はそれを知らぬものだから、いつの間にかその眞意を知らずして、之と反對に、いつまでも古い宗教をそのままに保持し、それを多くの人類に強いやうさへするのであります。」

A 「それが、今日の既成宗教ではありませんか。」

B 「先づ多くの既成宗教がそれです。尤も今日の多くの既成宗教だつて、初めからさうではなかつたのですが。そしてまた。今日の既成宗教だつて、必ずしも昔のまゝで、少しの變化もないと云ふのではないのですかね。」

A 「それを多くの既成宗教家は變つてはいかぬと云ふのではありませんか。」

B 「さう云つて、あるところに彼等の衰滅があるのです。」

(一九三二、五、五)

人生の眞意義 (其の三)

(宗教と人生 六)

土屋 觀道 述
安田 恢順 記

目次—第三睡眠欲—睡眠の必要—第四名譽欲—名譽の尊き—名譽の價値—名譽の範圍—第五財欲—財欲の必要—財欲の程度—五欲の範圍—五欲の見方—五欲の反省。

第三、睡眠 欲

人間に睡眠が必要なことは一晩でも眠らないで起きて居ればすぐ判ります。人として眠りの足りないとき気分晴々しない時はない、此の意味から云へばどうしても今の所人間としては睡眠はなくてはならぬものかと思はれます。それにかゝはらず、佛教では睡眠を以つて何故に五欲の中に入れてのでせうか。之は多くの人々が働くこともしないで眠ることのみに快樂を覺えるやうな懈怠の心を戒めたものであつて睡眠そのものを全部否定したものと考へられません。従つて、睡眠は之を積極的に云へば寧ろ働かんが爲めに必要としてとるならば反つて之を賞勵してさへよいかと思ふのであります。之に反して、眠たくても眠れず、一日も二日も三日も四日もと

第四、名譽 欲

それがつゞくならどうでせう、それを全く身心共に疲れ切つてしまふ事になるでせう。此の意味から云へば決して睡眠は今日の社會に於ては嚴禁すべきものではないのです。

之も亦、正しい意味から云へば多くの人々に此の心の無い人はないのです。乍然それを佛教で禁ずることは別に別の意味があるのであつて、名譽そのものを輕するが爲めではありません。何となれば名譽を重すると云ふことは人として爲すべき事を爲した人として、その人格を尊む所以であつて、名譽そのものを輕するからではないからであります。従つて、社會も國家も此の意味に於て、決して名譽を毀損する事を許しません。たゞ自讃

毀他と言つて、自分のみを讃めて、他を毀ると云ふことをこゝに禁するのであります。けれども、他をそしめることはやがて自分が譽められたい心の反映とも云へるし、又徒に譽められたいと云ふことは決してよいことではないのですから、さう云ふ慾心を禁するのであります。然しそれにもかゝはらず、名欲の根本中心を善意に深く研究すればそこには名欲の尊いものもありませんから、その意味に於て、此の名欲を尊むことは決して悪いことではないのであります。

第四、財 慾

此の事も、佛教では非常に戒めてはありますが、それも亦、今日の社會に於て、此の目を送るには無くてはならない一つのものだから、生活に必要なだけの財欲は當然なくてはならぬ事でありませう。

尙細かい事は後日御話いたすつもりであります。此の五つは人間の生活としては一方無くてはならぬものと

魚釣さんとわたくし

先月古橋の林香寺さんで、廿三、四の兩日に亘り、土

して、すべての人に要求せられて居ります。従つてそれだけ又お互に用心しないと其の爲めに自らを亡ぼし、又人に對しても多くの迷惑を興えることになるら佛教では特にこの事を戒めるのであります。だからと云つて之を極端に押えることは反つて本當の生活を意味するものではありませぬ。乍然それかと云つて、單に五欲を満足するのみが人生ならば寧ろ私共の人生は普通の動物の生活に劣ること萬々でせう。

たゞ、人はそこに理性の發達があり、靈性の發動があつて、單なる五欲の生活の外に、宇宙の眞理を發見し、自己の生活を反省して、永遠の生命と價値の生活とに自己を意義あらしめ、延ては神の生活を自分自身の上になく現はさうと云ふところに、本當の人生の意義があるのであります。而も此の點に氣つき、此の意味に立脚して人生の一生を統一し來たるとき、以上の五欲も初めて此の人生を完ふするの一要素として、そこに意義を生ずることになるのであります。(一九三二、五、五、追補)

古 賀 清 一 郎

屋上人の別時念佛會がありました。私もそれに參加の

爲め、岐阜から汽車で穂積驛に下り、一里餘りの田畑道を、春雨の降りしきりますなかを、ほつ／＼と歩み出しました。三日この方、降り続く雨で、道は歩み難い方でしたが、それも、餘り氣にならず、いやな感じも起らず、却て何となく、緩やかな落付た様の氣分でした。道ばたの桑や、柳の若芽やら、又色々の野菜や若草が、春雨の恵みを受け、ぐん／＼と勢一杯伸び上る勇ましき姿を眺めては、嗚呼私も此の通り、天地の恵みの内に、力強くぐん／＼と、伸ばして頂いて居るのだなと、嬉しく思ひ、如々と歩みを運び、約半里も來ました。

處がそこに道の片傍の小川に、一人の小男が雨にぬれて、釣をして居るのを見つけました。私も以前よく釣をしたもので、その興味は今尙はつきりと覺へて居りますので、此の雨の内、辛棒して釣て居るなと思ひ、自分の自體も多少汗も出ましたので、その儘立留まつて汗を拭き、暫らく眺めて居りました。

その時不圖私の胸に浮びました事がありました。それは「私は今上人の信仰の御話しを聞きに行く途中なのに、魚釣を見て、ほんやり時間を費す様の、呑氣の氣分では如何程立派な御話し承わつても、甲斐のない事ではあるまいか。ほんとに緊張味が缺けて居り、誠に恥しき次第ではないか。此の魚釣と私との對照は、餘りにも不

釣合ではないか」と。

それと同時に又たこんな考へもふら／＼と浮び出ました。それは「此の魚釣さんは一體よい事をして居るのであるか、又悪ひ事をして居るのであるか」と。

今迄の自分なれば、勿論此の人は殺生をして居るのだから、悪い事をして居ると、決めてしまふのですが、若し魚が絶対に誰れからも釣り上げられず、何時迄も、川中ばかりで、安らかに、その生命を終り續けて行くものなれば、安らかではあるが、魚としての生存の意義は認める事が出来ぬのでないか。又魚自身の立て場から申しても、魚が自分の生命を犠牲に供し、修養をしてこそ初めて佛界に往生する御縁に會ふ事が出来るのではあるまいか。若しそうとすると、魚は其生命を覺者の爲めに捧げます事は仕合ではあるまいか。然し此の働きは魚自身の力にては中々六ヶ敷き事だから、此の釣手に依り、釣り上げられて、佛に供養し、佛果を得る事が最も容易の事でわあるまいか」

此の如く考へると、そこに初めて釣る人も、釣らるゝ魚にも、共に意義を見出す事が出来た様にも思はれました。

彼の明治維新の砌、西郷南洲が討幕軍の參謀長として、京都を出發し、三條大橋の邊に差しかかりました時

道傍の群集の内から、一人のむさほらしき老尼(蓮月尼)が進み出て、つかくくと南洲に近よつて、懐中から一枚の色紙を取り出し、忝しく捧げました。南洲も何事かと思ひ、之れを取り上げて讀みますと、

討つ人も討たるゝ人も心せよ

共に御國の御民ならずや

と水莖の跡いとも鮮やかに、認めてありました。南洲も強く其胸を打たれ、押し頂いて之れを懐に納めました。後日幕府の勝海州と膝を交へ、話笑の裡に、江戸城を収め、維新の大業を完成しましたその陰には、此の蓮月尼の慈悲心の力が、與て大なる働きをしてゐた事も、拒む事が出来ません。之れ南洲は蓮月尼に依り、大なる魚を釣り上げたと思ひます。

こんなに思つて、靜かに此の魚釣さんの姿を眺めますと、それが春雨の降りしきりの中に、長い間此の川邊りに踞かんで不満とも思わす、不平も云わず辛棒して、私が來會すのを待受けて、此の生た説法をしてくれたと思ひますと、魚釣さんにも、川の小魚にも、共に心から感謝合掌せずに居られぬ様感じがしました。而かも此日、此に私が廻り會ひます迄には、幾多の魚釣が此の所で糸を垂れ、風雨寒暑を厭わす、私を受けた事かと思ひますと、今日の御縁は、魚らん觀世音が魚釣の上に顯われ

て、私への御濟度の様にも感ぜられ、ほんとに、如來大悲の御徳は、今宇宙の大きな力を以て、常に私一人を救ふべく説法せられ、私は如何に逃げ廻ても、此の大悲の内懐かれづめだと、感ぜずには居られませんでした。

釣と上人

私は從來、餘り釣りはよくない様に思ひ、人が釣て居るのを見ましても、何となく、良い感じは致しませんでした。然しよく考へて見ますれば、此の宇宙は釣合ひの世界ではありますまいか。商人は品物に依り客を釣り、お医者や辯護士等は看板で人を釣り、女は色で男を釣り、又生活上にも、家屋も釣合が程よく取れなければ成立たず、夫婦も釣合が大切だし、父子兄弟も親類も、他人との交際も、釣合が必要であります。一家の經濟から國家の經濟も、收支の釣合が大切だし、一國の政治も一家の治まりも、宇宙の運行も、共に此の釣合が能く整ふて、初めて萬物が生育する、即ち宇宙の大法則と無限の力との能く釣り合ひが、とれた姿が、大慈悲として顯われ、之れがその儘眞生道であり、之れを行ひますのが、眞生道であり、私共の努力致す行ひであります。此の行を徹底せしめんと、土屋上人は畢世の努力を盡し、種々様々に、手を更へ、品を更へ、教への釣を垂れ、私

を淨土に擲ひ上んと、苦心に苦心を重ねて倦まず、撓まず或は行基寺、或は唐澤山の靈場に、全国各地の同友と誘ひ合せ、惇々として教への釣を垂れられます。だから私共は魚が餌に飛び付いて、釣り上げらるゝ様に、そのまゝ、教への餌に飛び付きさへすればよい。然に私は何時迄も迷ひの世界に執着し、上人の教への中から自分に都合よい所を、囓り取ります。別時念佛の終頃には、腹も相當に膨れ、多少信仰の眞似も出来る様な心持で、今度こそは大丈夫と思ひますが、そろ／＼山を下りかけますと、矢張り元の木阿彌です。小魚が何時迄も、釣り上げられずに、水の世界にある様に、自分も迷ひの世界にあるかと思ひますと、實に恥しき感じがします。

現時世界の狀態は、混亂の極何れの方面も行きつまり、事業も、政治も、經濟も、思想も、教育も全くしやうがありません。或は國際聯盟と云ひ、軍縮會議と云ひ不戰條約等、種々雑多の手段方法を講じても、元來の出發點が、各自の私利と私慾とを遂げるのを目的とした計畫故益々自縛自縛の苦境に陥り、打開の途を發見する事が出来ないのです。之れ私共が宇宙の法則に導ひ、如來の道を行し全一の生活を行ふ事がないからであります。此の時上人が、眞生道を絶叫し、身命を賭して天下に呼號をせらるゝ

は、決して偶然ではありません。天茲に上人を此の上に降し、此の道を説かしめらるゝとこそ、實感せず居られぬのであります。茲に於て私共同志がその一員として、僧に斯道を叫ぶのは何たる幸福ぞと思ひます。合掌。

眞生同盟の徽章が出来た

□今度行基寺の全國眞生同盟幹部會に於て、かねてから懸安になつてゐた眞生同盟の徽章が制定されました。
□その意匠は咫鏡の中に星を入れ、星の中に日の丸がこめてあります。咫鏡は八稜の鏡、八は開くの意、稜は火の燃える相、鏡は神を現はします。
□佛教で言へば鏡は佛智、形は八葉の蓮華、蓮華は慈悲、八は八正道、即ち智慧と慈悲との佛心を示す、又佛陀の淨土即、涅槃の神境であります。鏡の色はグンジョウ天の大空佛教の皆空、涅槃を意味します。外側の縁は白色清淨の白蓮です。
□星は希望、曉の明星、東天に輝く太陽の將に昇らんとする前提を示すのであります。夜あけ前の東天の星、釋尊成道の當時を連想するところに私共の望みがあります。星の色は白、希望の輝きを意味します。
□星の五稜なるは地水火風空の五大、中央の日の丸を識

希望に輝く。巧妙なる淺野議長の司會によつて、協議を了えたのは既に十一時であつた。この草案は更に起草委員に依つて條文の修正等を行ひ、來るべき信州唐澤山の全國大會に於て承認を得ることとなるであらう。

(末尾に記載したる草案御参照を乞ふ)
續いて細目協議に移る。

眞生同盟のマークは、土屋上人の考案により、尼ヶ崎豊田氏の圖案せられたるものを、満場一致承認決定し、これによつて銀製會員章を製作することとなり、大阪會我尾氏、東京都築氏、名古屋伊藤氏の三委員に調製を委任した。

別時念佛會の構成についても協議し、種々新らしき試みをなすこととなり、プログラムを新たに編成し、明朝より直ちに實行に移ることとなつた。今迄は殆んど住職山田上人の御別時の感があつたが、これによつて「我等

の別時」としての色彩を鮮明することとなつた。文書出版については、近刊「人生と宗教」については互いにその頒布に努力すべきこと。及機關紙「眞生」について、補助紙「一味」について及パンフ、ツト等發行について協議した。

同盟の歌、同盟の標語、同盟の服装等制定の件につき意見發表あり、一同寢に就いたのは既に二時を過ぎてゐた。
かくて意義深き本大會は終つた。悦びと希望とに躍る胸を抱きて深き眠りに入る頃、臥龍の山の端高く月は輝やいたであらう。三千年の昔大聖釋尊の足下を照したその月は、今や母の如く我等を打ち守り、淨土建設の大業を完成せよと語りたであらう。(同盟規約草案は來月號に掲載します。)

— 昭七、五、八 —

支部通信

■津島支部通信

私達の支部の機關誌のようになつてゐる「一味」を、去る一月末から、驛で自販賣するようにしました。一部二錢で

月に百部以上確實に賣ります。自ら二錢でも拂つて買つて行く人は眞劍な讀者です。無料で贈呈して讀んでゐるか讀んで居らぬかわからぬような死讀者よりも餘程力があると思ひます。方法は極めて簡單です。一個十錢のハ

バキ差しの箱を買つて来て、それに「一部二錢」を貼札して、中へ「一味」を折つて入れ、錢は自由に引換へに中へ投入して行くようにしてあります。勿論、箱を逆様にすれば錢も盗める、代金を入れるも入れぬも自由です。簡單

で無難作にしてあるところに親しみ、信仰味を豊かにすることが大切です。各支部でも此の「一味の自由販賣」を試みて見て下さいませ。所要数は無代贈呈します。そして賣上げの五十錢でも一圓でも各支部の雜費に當て下さいませ。宣傳と經濟を兼ねた良法だと思ひます。田舎の停車場や信用組合のような處ほ、いゝと思つてゐます。

これは揭示傳道と同時に進む一層兩々有効です。揭示傳道の方法、文案は御通知します。すればそれが、自分達の集會通告の揭示場ともなり、又對外的宣傳場ともなつて積極的進出の一方法であります。(中野)

■東京支部通信

五月一日 遠足會
氣つかわられた昨夜の雨もぬぐつた様に晴れて、吾等眞生會員は今日の集合地である。本所押上驛へ元氣な顔を見せた。懐しき喜びに満ちた御挨拶は交される。先頭には眞生會旗がはためいて居る。

役員の手配によつて、各自の胸に徽

章が飾られた。皆さんのなごやかな顔色と眞生會旗を驛に來る多くの人達は見並べて、眞生に輝く吾等の存在を、不思議な羨望を混合させた様な瞳を向けて過ぎて行く。八時半押上驛發東京成電車に乗る。來會者七十三名、雄大な荒川放水路を過ぎる頃より、電車は新緑の野をひた走り來る。

沿線の農家には尙武祭を祝纏幟や吹流しが、青空になびいて居る。いつしか松林地帯に電車は這入る、松林の中に赤い瓦の文化住宅などがのぞかれて、白い鷄が忙しきうに餌を啄いはんて居るのが見える。

昔、水戸黄門が迷つたま云ふ八幡の籤もここにあるそうだ、松林地帯を抜けるもこゝにある限り夢の丘だ、まごころく黄金色の菜の花が點々として咲き、習志野騎兵聯隊の營舎が丘の蔭から見えるなどして、程なく幕張につく。

驛には日暮里から乘られた、藤田さん根來さん、小野さん、佐藤さん、なごにこやかに待合せてくれて、参々五々、大山裏の都築別荘へ行く。

淳朴な農漁村だ。牛が草屋根の農家の軒先で鳴いて居る。籠越しに白い藤の花など見える家もある。都築様の別荘は村より少しくはなれた、小山の麓にあり、赤い瓦の洋館に陽が一杯映えて美しく見える。

都築夫人が小路まで御出迎下さる。邸内には皐月が今をさかりに咲いて居る。小憩ののち、邸内の松の小山に設けられた「迷路」の遊びに入る。

「迷路」は三方に入口があり、西洋の物語りに出て來る迷宮の様に、いくつかの迷路があり、漸く探しあてた一筋路によつて、目的地に入るのである。

目的地は、あづまやである。小野さん青木さんが懸賞係に、鈴木さん、都築さん、櫻井さんが審判にて始められる。小供達はこの迷路を、突破して、美事に目的地に入らんものとして、小首を傾げて眞劍に、考へて居る姿には微笑まづにはいられない。

皆常々をかゝえて喜々として喚いで居る。御中食ののち、福引を各自に引く、午

後の自由散歩時間を海に入つて、貝や蟹などを漁るもの、セリや蓬を籠に一杯に摘んで居るもの、心ゆくまで大自然に親しむ。

お八つ時間は、邸内におでんや、御壽司やカツモチやの屋臺店が並んで、野趣に富んだ御馳走に舌鼓を打つ。

歸路に先立ち、御中食の後引いた福引を福引係の都築さん櫻井さんの呼聲によつて、景品は渡される。

福引には「秋の夕ぐれ」「兒島高德」等色々な冠有あり、秋の夕ぐれは陰氣で、美しいインキをあてゝ喜ぶ人、兒島高德は木をけづつて書くで鉛筆をもちつて苦笑する人、道友達の爆笑の連續裡に、豫定のプログラムを終つて歸路につく。たのしい一日であつた、會の充實發展は御同慶に堪えない。

益々御道友の健やかなる信仰の御涵養と、同盟の發展をいのちすにはいられない。

吾朋便り

行基寺三昧會全國同盟幹部會

去る四月行基寺に於ける三昧會に各地の道友の集りを中心として、特に全國眞生同盟の幹部會が開かれました。集る者東京、静岡、神奈川、愛知、岐阜、三重、大阪、尼ヶ崎、新潟等の各府縣からの集りでした。詳細の報告は何れその條よりあるべきですが、間に合ふ爲め私の方から略報いたします。東京並に大阪方面からは會社などの都合でどうしても来れぬ云ふので僅に十七日一日をくり合せて来さまで頂いた方もあつた位、夜も一時半でも規約制定の草案を供議した程でありました。本定には七月唐澤の大會で總會に上せることになつて居ります。

集る者は例年に比し其の数は少なかつたのでしたが、それでも六七十名を越したかと思ひます。何れも道友の氣持が全く一身同體の熱烈でありました。其後各地からの情報によりますと、名古屋でも支部會を開いて今後の發展策を構せられ、大阪でも来る十五日その支部大會を開くことになつて居ります。東京の方でも先月二十三日都築氏の宅に座談會を開き更に色々の發展策が構せられました。

東京 土屋觀道

各地に於ける道友の眞生主義に對する發展は私の衷心から喜びに堪えないことゝあります。殊に最近に於ける各地道友の熱心ぶりは確に近年にない隆盛の氣

運を示すものと言はればなりません。乍然それと同時に近代に於ける世界の大勢帝國の將來等を眺め來る時、今日の社會狀態は必ずしも觀を許すべきときではありませぬ。或は政治に經濟に、その他社會の思想問題等に考へ及ぶとき私共は非常に警戒を要するものゝ多々あることを感ぜずにはあらぬのであります。今日

眞實に人類の發展を理想せず、國民の使命を明にせず如來の大道を中心にしたものではないところに私共のどうしてもあき足らぬ所があります。

の政治が殆ど有産階級の占有に屬し、既成政黨はたよるに足らないし、資本主義の行き詰りが社會主義の勃興を來してゐることも近頃また反動フアンが非常な勢を以つて臺頭して來たが如きは私共の心に警戒を要する點かと思ふのであります。少くとも此の世を一丸として如來

此の點深く私共が注意して此の中心に眞生の眞意義を明にせなければならぬのであります。要は時代の進歩と共に、現實を離れぬ理想の生活であつて、政治も經濟もその他あらゆる思想信仰も此の宇宙の生命より來たる全一の生活でなくてはならぬと云ふのであります。

を中心とした全一主義の上から今日の社會を見ますれば殆ど凡ての上根本的改造の必要を感じないものはないかと思はれます。私共は決して資本主義がよいこと云ふのでもなければ社會主義がよいこと云ふのでもなく、又帝國主義や共産主義がどうかう云ふのでもなく、又フアンが必ずしも歡迎しないものではありませぬ。乍然今日の多くの之等の問題は未だ

而も今や私共は此の主義と主張を吾々の間許りに主張するに留めずして廣く世界の同盟に此の主張を呼びかけて、此の生活を擴大したいものです。

猶、福岡に於て、道友新岡次郎氏が去二日他界せられた由やは昨日その父君の墓から報らせがありました。氏は數年前から、唐澤や行基寺にも参加せられ、殊に衷心から眞生の運動に専念せられた方でありました。然にそれにもかゝらず、常に病魔に犯されて心行。不一致なげかれて居りましたが、此の點特に私と同情樂し能はざる所でありました、それだけ私共は離れ難い深いちぎりがあつたのです。(五月九日。念)

名古屋市 渡部善兵衛様より
先月廿一日廿二日御來名中は最も尊き御

敬示を拜聴致し眞に感銘の至りに奉存候
月未無事御巡教を了へ御歸京被遊候趣き
大慶至極に奉存候黒宮氏御夫人も終に大
往生を遂げ被成誠に悲痛に堪へざる儀に
御座候乍去今や淨土に御往生の御身させ
ば羨しき様の筈に候へ共私に此世が戀し
くてナサケナキ次第に御座候先は御禮旁
一寸感想を開述致し候御笑ひ被下度余は
拜眉を期し申候

奥様へ宜く御鳳聲願上候 合掌

■尼ヶ崎市 圓平寺様より
合掌お上人様のおたより拜見して本當に
心から安心いたしました随分此度はお疲
れの様に行基寺で拜して居りましたから
毎日心にかゝり居りました昨日もこちら
は大變な大雨、たしか廿八日頃迄の様に
うかゞつて居りましたから昨日一日中東
京の皆さんの事思ひ浮べてなつかしく思
つて居りました皆さんも御無事事の事な
によりうれいすお姉さんはいよいよ
お歸りになりますかもう一度大阪へよ
れませんかどうか敬草のことは豊田榮さん
から上人様の所へくわしく申上るご云ふ
てみへました。十五日大阪の大會です、

くわしい事は曾我尾さんからわたよりあ
る事と思ひす奥様へもよろしく
■桑名町 五井豊子様より
此度は久々の御越ぎありがたう存まし
た御縁に薄き悴もお蔭様で列席する事を
得て本當に嬉しう御ざいましたお天氣の
わるきも集りの少きもすべて皆知來様の
御計ひの様に存せられて尊くもありがた
う存ました古賀様御夫婦の御越下さいま
した事も矢張御引合せ難有ぞんじまし
た俄の御出立に何のいさまもなく誠に失
禮いたしました幾重にも御許頂きたう存
ます早速御禮申上べきの所却て御葉書頂
き恐入りました乍憚儀奥様にも御宜敷御傳
へのほど御願申上ます先は御禮かた
合掌

■名古屋市 尾上銀子様より
右乍延引御挨拶申上候也。合掌
その後は大變御ぶさた申上りました。

御上人様始め皆様には御變もあらせら
れず御くらしで御座いますか御たづね申
上ます上京中は一度御うかゞひ申上てさ
ぞんじ乍勝手のみ致しまして誠に申譯も
ありませんあしからず御用捨下さい。本
月は御拜まつ致し度思ひ居りますがそれ
もいかゞかぞんじて居る様な事にて實
は昨夜當地の堀先生の御世話にて東すし
の食堂にていろ／＼な相談會がありまし
て仰により私も参加させていたゞきまし
たがなか／＼皆々様の御ねつしんある御
相談にて大變よろしう御座いましたこれ
から眞生會も盛會に成る事さうれしく思
はれましたから一寸かいつまみ御報告申
上ました本日眞生會のきしよふ商品見本
にて五个御送附申上りましたから御受取下
さいませ
又後の銅のは六日頃出来上るよし伊藤様
の御つたへで御座いますから右様御承知
置き下さませ。
先は御不きた御詫方々御報告まで
末筆乍皆々様へよろしく御傳へ下さいま
せ。合掌

■岐阜早縣 行基寺様より

■滋賀縣 小川龍導様より
過日來行基寺様に於ける御念佛會中は種
々御指導御化導被下雖有重々御禮申上候
販事後不在中の要務の整理致居り失禮仕
り候

■名古屋市 尾上銀子様より

見本として本日御貴家様迄で御送り申し
ます又大阪の方へは私事今晩行きますか
ら曾我尾様に御渡し致し又御相談しま
す金色の臺の御話はヤハリ(丹銅)にメ
ッキを致すより仕方無いこの事故其れに
て三十個注文して置きました
是は必ず良いでせうこの事です七日頃
出来る事に成つて居ますから御送り申ま
す。當名古屋眞生會も今晩廣小路の東す
しにて婦人會合同にて會合致すはずで
す皆さん堀先生始め大骨折して頂きまし
た又渡部様も乗り氣して頂いて居ますサ
ラ今晩は良い會合だご今から喜んで居り
ます次に黒宮様奥様御他界に相成り實に
御氣の毒様です。

■大阪府 豊田省三様より

四月二十七日附の御端書雖有拜讀いたし
ました行基寺の御別時不相變御盛會で
あつたご承りまして誠に悦ばしく存じ上
げますその後早速後で集りがありまして
今後の進むべき方法などに付き皆さんご
打合せをいたした様な事であります次に
宅の子供も東京の下宿を去る四月二十七
日に引越したいたしました今度は麴町五

此項中は御來教被下道友の集り誠に眞生
運動の基礎的協議會の開催せられし事は
當山の光榮と喜び申候全く御上人御思召
の御餘光と合掌仕候此上共に當山を修養
道場として社會的存在價値を現はすご共
に自分自身も大に社會的に活動せん事を
感じ申候豫定の通り無事御版宅の旨乍恐
安心仕候皆様の御喜び御察し申候此上共
によりしく御指導願上候二三日前眞御
送附申上候御與様へよろしく内よりもよ
ろしく申出候

■ハルピン 原吉郎様より

昨日哈爾濱より吉林に至り同地驛頭に於
て多門將軍の率ゆる高田歩兵第三十聯隊
越後兵の勇姿を歓迎し感慨實に無量なる
ものあり。本日執政博儀氏と會見新國家
の前途を祝福し明朝發大連へ向ふ豫定に
候皆々様へよろしく。

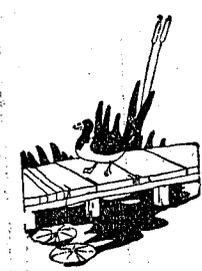
■名古屋市 伊藤留吉様より

合掌御書面を頂き恐入りました御全家様に
は御無事の由御喜申上ます次に私方一
同無事ですから他事乍ら御休心下さい眞
生會のメタルの件本日出来る事に成りま
した甚だ延引致しまして相濟ません商品

■名古屋市 尾上銀子様より

番町十番地の神山徳太郎さま素人下宿
へ移りました家内の病氣も追々よろしい
方でありますので御安心を願います
合掌

■浦賀町 上坂清一郎様より
拜啓今般は父の大患に就て御高配を煩は
し且つ昨日は結構なる衣類御惠贈下され
誠に御厚志の段有りがたく正に拜領仕り
早速父の許へ届け申候處殊の外感謝仕り
居り候。
父の経過其後第二回の(カン化膿)切開
手術も順境に御座候へ共如何にせよ平素
餘り健康體に非らざる父の事なれば主治
醫よりも注意警戒を德應致され居りつれ
なき落花の風情も誠に感慨無量に有之候
先は御禮申上げ失禮ながら端書を以て御
禮申上候



吊詞

黒宮 榮子氏 四月二十九日 (愛知縣)

新飼 次郎氏 五月二日

長島 岩吉氏 五月五日 (浦賀)

西澤 顯鳳氏 (澁温泉寺)

井口 庄藏氏 五月八日 (長岡市)

右道友御變遷の段謹んで御申上候。

全國眞生同盟本部

誌代拂込者並寄贈者御芳名

○壹圓宛 浦賀伊藤いく様、長安寺様 △東京白江やイ様 △福岡教安寺様 △
愛知大賀健三様 有我善吉様、宮崎うめ様 ○貳圓 岡崎近藤清太郎様 ○參圓
宛 松本多田助一様 △岐阜馬淵儀様 ○七圓 柳河武田哲哉様 ○拾圓宛
愛知木多壽様△四日市眞生製陶所様 ○五圓 大垣佐藤秀夫様 ○一圓岐阜日比東様

誌本定價
一部金十錢 郵税共
半年金六十錢 同
一ヶ年金一圓 同

注文の注意
◆講讀希望者は代金を添へて御申下さい。
◆誌代は總て前金御拂込の事
◆送金は振替によるのが便利
です。

昭和七年五月十日印刷納本
昭和七年五月十二日發行

東京市芝區芝公園十四號地九番

發行兼編輯人 土屋 觀道

東京市外澁谷町中通二ノ四二

印刷人 副島 慎夫

東京市外澁谷町中通二ノ四二

印刷所 丹丘舎印刷所
電話青山七五九番

電話青山七五九番

東京市芝區芝公園十四號地九番

發行所 眞生社

振替口座東京四七二八八番